

推薦・特色

令和7年度 入学試験問題

国語

解答上の注意

- 1 解答用紙には、解答欄以外に受験番号欄があります。受験番号を記入し、さらにその下のマーク欄にマークしなさい。
- 2 解答は、解答用紙の解答欄にマークしなさい。例えば、

1

と表示のある問いに対して ① と解答する場合は、次の（例）のように解答番号1の解答欄に ① をマークしなさい。

解答 番号	解 答 欄										
1	<table><tr><td>●</td><td>2</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>6</td><td>7</td><td>8</td><td>9</td><td>0</td></tr></table>	●	2	3	4	5	6	7	8	9	0
●	2	3	4	5	6	7	8	9	0		

- 3 解答用紙は鉛筆でマークした部分を機械で直接読み取るので、解答用紙の注意事項を正しく守りなさい。特に、訂正する場合には消しゴムで丁寧に消し、消しきずはきれいに取り除きなさい。

著作権保護のため本文は掲載していません。

著作権保護のため本文は掲載していません。

著作権保護のため本文は掲載していません。

(橋爪大三郎『人間にとって教養とはなにか』より)

【文章四】

次の文章の出典は『韓非子』で、原文は漢文です。【文章二】に出てくる「矛盾」のもとになった話です。

楚人^{そひと}に、盾^{たて}と矛^{ほこ}とを鬻^{ひざ}ぐ者^{しや}有り。

之^{これ}を誉^ほめて曰^いはく、「吾^わが盾^{かた}の堅^{かた}きこと、能^よく陷^{とほ}すもの莫^なきなり。」と。
又^{また}、其^その矛^こを誉^ほめて曰^いはく、「吾^わが矛^この利^きなること、物^{もの}に於^おいて陷^おさざる無^なきなり。」と。

或^ある人^{ひと}曰^いはく、「(B)」と。

其^この人^{ひと}、応^{こた}ふること能^{あた}はざるなり。

(現代語訳)

楚の国の人で、盾(防御する武器)と矛(攻撃する武器)を売る者がいた。

その人が盾をほめて、「私の盾の堅いことといったら、これをつき通せるものはない。」と言った。

また、矛をほめて、「私の矛のするどいことといったら、どんなものでもつき通せないものはない。」と言った。

そこである人が、「《省 略》」と尋ねた。

その人は答えることができなかったのである。

問一 【文章一】で筆者は、なぜ本は重要だと言っていますか。最も適

当なものを次から選び、番号をマークしなさい。解答番号 1

① 生活にすぐに役立つわけではないが、身につけておいたほうが
いいことを教えてくれるから。

② 勉強ができるようになって人からほめられたときの達成感や喜
びを味わせてくれるから。

③ 社会に出て、競争の厳しい世の中を生きていくための知恵を与
えてくれるから。

④ 人生の奥深さや複雑さを知ること世の中に順応していくのに
役立つから。

⑤ 身近に教えてくれる人がいなくても知りたいことを学ぶことが
できるから。

問二 傍線部 A 「文学を読めば」とありますが、文学を読むことでどう

なると筆者は言っていますか。最も適当なものを次から選び、番号
をマークしなさい。解答番号 2

① 自分と話が合う文学仲間が増えることで、良い友人や生涯の
パートナーに巡り会うことができる。

② 作品上の登場人物と現実社会でつきあう人との共通点を見いだ
して、人の心が読めるようになる。

③ 現実の世界から一時的に離れることで、現実を冷静に見ること
ができるようになる。

④ 登場人物の行動をまねることで、周囲の人と良好な人間関係を
築くことができるようになる。

⑤ 他の人の経験を間接的に積み重ねることで、適切な人間関係の
築き方がわかってくる。

問三 【文章二】の空欄（Ⅰ）から（Ⅳ）にあてはまる語句の

組み合わせとして最も適当なものを次から選び、番号をマークしな
さい。解答番号 3

① Ⅰ 答えのある小さな問題 Ⅱ 答えのない問題

Ⅲ 答えのある小さな問題 Ⅳ 答えのある大きな問題

② Ⅰ 答えのない問題 Ⅱ 答えのある問題

Ⅲ 答えのある問題 Ⅳ 答えのある小さな問題

③ Ⅰ 答えのある問題 Ⅱ 答えのない問題

Ⅲ 答えのある問題 Ⅳ 答えのない小さな問題

④ Ⅰ 答えのある問題 Ⅱ 答えのない問題

Ⅲ 答えのない問題 Ⅳ 答えのある小さな問題

⑤ Ⅰ 答えのない小さな問題 Ⅱ 答えのない大きな問題

Ⅲ 答えのない大きな問題 Ⅳ 答えのある小さな問題

問四 【文章三】で筆者は、技術の習得について、どう考えていますか。

最も適当なものを次から選び、番号をマークしなさい。

解答番号 4

① 親方の教えが記されている本で学べば、親方がいなくても技術
の習得は可能である。

② 親方から直接教えてもらっても、現代では技術が習得できるわ
けではない。

③ 親方の教えが記されている本で学べば、親方以上の技術が確実
に習得できる。

④ 親方に直接教えてもらうことで、いつかは親方以上の技術を習
得することができる。

⑤ 親方の教えが記されている本で学んでも、親方の技術を習得す
ることはなかなかできない。

問五 【文章四】の空欄（B）にあてはまる文として、最も適当な

ものを次から選び、番号をマークしなさい。解答番号 5

- ① 子の矛を以て、子の盾を陥さば何如。いかん
- ② 子の矛を以て、吾が盾を陥さば何如。
- ③ 子の盾を以て、子の矛を陥さば何如。
- ④ 吾が盾を以て、子の矛を陥さば何如。
- ⑤ 吾が矛を以て、子の盾を陥さば何如。

（注）○ 子…あなた

○ 何如…どうであるか

問六 【文章四】の話から、「矛盾」という言葉ができましたが、「矛盾」

は現在どのような意味で使われますか。最も適当なものを次から選
び、番号をマークしなさい。解答番号 6

- ① この世にはまったく存在しないこと。
- ② つじつまが合わないこと。
- ③ めったにない珍しいこと。
- ④ 二つのものの差が開きすぎていること。
- ⑤ 二つのものには違いがほとんどないこと。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「おい、末永^{すえなが}。早く来いよ」

ぼくがみんなの輪にはいりかけたときに武藤がどなつて、ふりかえると末永が昇降口から出てきたところだった。長髪を、トレードマークのヘアーバンドでまとめた末永が、長い手足をふつて一気に迫ってくる。

「太二、パーな」

武藤は小声で言うと、そっぽを向いた。いままで一度もなかったことだが、みんながなにをしようとしているのかはわかった。やめたほうがいいよ、という言葉が口から出なかったときに末永が到着した。

「悪い悪い。給食のあと、腹が痛くなつてさ」とおくれた言いわけをする末永を尻目に、

「グーパー、じゃん」とみんなが声をだした。

「あっ」

自分だけがグーだとわかり、末永がしゃがみこんだ。うなだれた顔にかかった髪のスきまから、とがらせた口が見えた。

「^Aすげえ偶然だな。おい、末永。手伝つてやりたいのは山々だけど、よけいなことをしたら先輩たちに怒られるからよ」

武藤は早口で言うと、さあ行こうぜというように右腕をふった。ぼくは残つて末永と一緒にブラシをかけようかとおもつたが、久保に肩をたたかれて、みんなにまぎつて小走りで校舎にもどつた。

たまたま末永がおくれたのか^Bこつて、武藤がワナをしかけたのだ。もしも末永と同時に到着していたら、ぼくもグーをだしていたかもしれない。ぎりぎりセーフと安堵すると同時に、末永がキャプテンの中田さんから顧問の浅井先生にこのことを訴えたいへんだと不安がよぎつた。

中田さんはふだんはおだやかだが、一度怒ると簡単には相手を許さなかった。夏休みの練習で、数人の二年生が日かげでサボっていたときに

は、自分も一緒にやるからと二年生全員で二百回素振りをした。あらかじめ注意されていたのに、末永ひとりをハメたことがばれたら、どんな罰を与えられるかわからない。

こんなことなら武藤の言いなりになるんじゃないかと、ぼくは後悔していた。でも、聞こえなかったふりをしてグーをだしていたとしても、自分だけいい子になりやがつてと、みんなの反感を買っていただろう。

久保が武藤についたのも、ぼくにはショックだった。久保は小学一年生からの友だちで、超がつくほどまじめなやつだ。そのぶんかけひきがへたで、肝心なところで相手に裏をつかれる。グーパーじゃんけんでもよく負けて、三回に二回はコート整備をしていた。だから、というわけでもないが、ぼくは久保ならこういうときは絶対にとめるだろうとおもっていた。

武藤と末永はブレーススタイルがよく似ていた。二人とも百七十五センチをこえる長身で、威力のあるサーブ&ボレーを武器にしている。ツポにはまると手がつけられないが、ベースラインでの打ちあいをやや苦手にして、自分のイーजीミスから崩れることが多いところまでそっくりだった。

(C)、武藤が練習熱心なのに対して、末永はすぐに手をぬこうとする。筋トレのときに、末永がまじめにやらなかったせいで、スクワットや腕立て伏せの回数を増やされたことも一度や二度ではなかった。だから、武藤が中心になってハメたのはたしかに行きすぎだが、末永にまったく(D)がないわけではなかった。

そうはいっても、ひとりで四面のコートにブラシをかけるのはたいへんだ。末永の性格からすると、途中で投げださないとかがぎらない。それをきっかけに末永が退部したら、後味の悪いことになってしまう。

昼休みのおわり近くに、四階の教室の窓からグラウンドに目をやると、末永はまだブラシをかけていた。かなりがんばったようで、残りは半面だったが、そこで昼休みの終了をしらせるチャイムが鳴りだした。

両手にブラシを持った末永は前かがみになって最後の力をふりしぼり、コートの上にたどり着くなり地面にひざをついた。

末永は放課後の練習にいつもどおり参加したので、ぼくは胸をなでおろした。今回は大ごとにならずにすんだが、昼休みのグーパーじゃんけんがあるかぎり、こうした問題はくりかえされるのだとおもうと気が重かった。なにより、武藤の言いなりになってしまった自分が情けなかった。練習にも集中できず、ぼくはどうすればいいのかを考えながら家までの帰り道を歩いた。

(中略)

修業を始めて一年半がすぎ、父はかなりの手応えを感じているようだった。このところ父の豆腐は一段とおいしくなっていたし、料理の腕まであがって、今夜の麻婆豆腐はこれまでで最高のおいしさだった。

「うん、うまい」と答えたたん、ぼくは悲しくなって顔をふせた。

「おい、どうした？」ときかれても返事ができず、ぼくはトレーナーの袖で涙をふいた。

「部活かクラスで、うまくいかないことでもあるのか？」

「あるけど、だいじょうぶ。自分たちでどうにかするから」

「そうか」

「うん。言っとくけど、おれがいじめられているわけじゃないからね」

かえって心配させてしまう言い方だったと気づいて顔をあげると、父はそれ以上はなにもきかずに、黙ってごはんをかきこんだ。

「よし、ごちそうさま。悪いが、おとうさんは風呂にはいって、そのまま休むぞ。一時間もすれば弓子が帰ってくるだろう。あいつも勉強で疲れているはずだから、おまえが麻婆豆腐や味噌汁を温めなおしてやってくれ。あと、あしたの朝はパンだからな」

午前二時半におきる父は、午後九時には寝てしまふ。以前は夜中に酔って帰ってくることもあったのに、このところは健康そのものの生活で、そうでなければおいしい豆腐はつくれないとのことだった。

(中略)

「ねえ、おとうさん」と、風呂場にむかうとする父にぼくは声をかけた。

「なんだ、どうした」

「このところ、腰はいいの？」

「良くもないが、悪くもない。今、ギックリ腰をやるわけにはいかなからな。準備体操は念入りにしているし、適度に動かしているほうがからだにはいいみたいだ。なんだ、おまえ、腰が痛いのか？」

「いや、そうじゃなくて」とぼくがためらっていると、父は息をついてイスにすわった。

「そうだな。豆腐屋になると決めてから、おとうさんは自分の仕事のことばかり考えていたからな」

独りごとのようにつぶやき、父はテーブルに両手をのせた。豆腐づくりを始めてから、父の手はふだんでも白くむくんでいた。冷たい水に手をつけることが多いので、タオルでふいてもどうにもならないのだという。

「頼みごとがあるなら、遠慮しないでいいぞ。なんだ、新しいラケットかシューズでも欲しいのか？」

「いや、そうじゃなくて、いつかまた家族四人でテニスをしたいたいのもってさ」

ぼくが言うと、父はいったん視線をはずしてから小さくうなずいた。ほんの一年間だけだったが、ぼくが小学一年生のときは毎週土曜日に家族四人でテニススクールに通っていた。練習のあいまに親チームと子どもチームでダブルスの試合をしたり、つぎのときは男チームと女チームで戦ったりと、本当に楽しかった。

「おとうさんたちのラケットも、とってあるんでしょ？」

「ああ、ちゃんと押入れにしまっている。おまえが小学生のときに使っていたラケットも一緒に、四本まとめてとってある。でも、使う前にガットをはりかえないとな」

「それならよかった。呼びとめてごめん、明日も早いんでしょ」

「ああ、さっさと風呂にはいらな」とな

「F そう答えながらも、なかなかイスを立とうとしない父のまえで、ぼくは麻婆豆腐をたらふく食べた。」

(中略)

朝練では、一年生対二年生の対抗戦をする。シングルマッチで一ゲームを取ったほうの勝ち。四面のコートに分かれて、合計二十四試合をして、白星の多い学年はそのままコートで練習をつづける。負けた学年は球拾いと声だしにまわる。

力試しにはもってこいだ、二年生との実力差は大きくて、これまで一年生が勝ち越したことはなかった。武藤や末永でも三回に一回勝てるかどうかで、久保は一度も勝つことがない。ぼくは勝率五割をキープしていたが、団体戦に出場するレギュラークラスには歯が立たなかった。ただし、一度だけ中田さんから金星をあげたことがある。ベースラインでの打ちあいを持ちこんで、ねばりにねばって長いラリーをものにした。誰が相手であれ、きのうからのモヤモヤを吹き払うためにも、ぼくはどうしても勝ちたかった。(I)

ところが、やる気とは裏腹に、ぼくは一ポイントも取れずに負けてしまった。武藤や末永もサーブがまるで決まらず、ダブルフォールトを連発して自滅。久保も、ほかの一年生たちも、手も足も出ないまま二年生にうち負かされて、これまでにない早さで勝負がついた。

「どうした一年。だらしがねえぞ」(II)

キャプテンの中田さんに命じられて、ぼくたちはグラウンドを走らされた。いつも先頭をきっている、みんなの姿を見ずに走るのはなれていたが、今日だけは武藤や末永や久保がどんな顔でついてきているのか、気になってしかたがなかった。(III)

足を止めて、一年生全員で話しあいをして、昼休みのコート整備を当番制にかえてもらうようにキャプテンに頼もうと言いたかったが、おも

いきれないまま、ぼくはグラウンドを走りつづけた。

「よし、ラスト一周。ダッシュでまわってこい」

中田さんの声を合図に全力疾走となり、ぼくは最後まで先頭を守った。「ボールはかたづけておいたからな。昼休みのコート整備はちゃんとやれよ」

八時二十分を過ぎていたので、ネットのむこうは登校する生徒たちでいっぱいだった。武藤に、まちがっても今日はやるなと釘を刺しておきたかったが、息が切れて、とても口をきくどころではなかった。

ラケットを持って四階まで階段をのぼりながら、ぼくは武藤と話さなくてよかったとおもった。ぼくが武藤を呼びとめていたら、ほかの一年生はぼくたちがなにを話しているのかと、気になってしかたがなかったにちがいない。武藤ではなく、久保か末永を呼びとめていても同じ不安が広がっていたはずだ。冷静に考えれば、きのうのことは一度きりの悪だくみとしておわらせるしかないわけだが、疑いだせばきりがないのも事実だった。

(中略)

⁹ ウラでうちあわせ可能な手口がつぎつぎ頭にうかび、これはおもっている以上に厄介だと、ぼくは頭を悩ませた。

やはりキャプテンの中田さんに助けてもらうしかない。そうおもったが、それをおもいとどまったのは、きのうから今日にかけて、一番きついおもいをしているのは末永だと気づいたからだ。末永以外の一年生部員二十三人は、自分が加担した悪だくみのツケとして不安におちいつているにすぎない。それに対して末永は、今日もまたハメられるかもしれないという恐れをかかえながら朝練に出てきたのだ。最終的に中田さんに頼むとしても、まずはみんなで末永にあやまり、そのうえで相談するのが筋だろう。(IV)

そう結論したのは、三時間目のおわりぎわだった。おかげで授業はまるで頭にはいつていなかったが、ぼくはようやく自分のするべきことが

わかった気がした。そこでチャイムが鳴り、トイレに行こうと廊下に出ると、武藤が顔をうつむかせてこっちに歩いてくる。

「よお」

「おっ、おお」

武藤はおどろき、気弱げな笑顔をうかべた。そんな姿は見たことがなかったので、もしかすると自分から顧問の浅井先生かキャプテンの中田さんにうちあけたのではないかと、ぼくはおもった。たっぷり怒られるだろうが、それでケリがつくならかまわなかった。

それなら、昼休みには浅井先生か中田さんがテニスコートに来るはずだ。給食の時間がおわり、ぼくはテニスコートにむかった。しかし集まったのは一年生だけだった。ぼくは落胆すると同時に自分の甘さに腹が立った。

いつものように二十四人で輪をつくったが、誰の顔も緊張で青ざめている。末永にいたっては、歯をくいしばりすぎて、こめかみとあごがびくびく動いていた。いまさらながら、ぼくは末永に悪いことをしたと反省した。

しかしこんな状況で、きのうはハメて悪かったと末永にあやまったら、どんな展開になるかわからない。武藤をはじめとするみんなからは、よいなことを言いやがってとうらまれて、末永だって怒りのやり場にこまるだろう。だから、一番いいのは、このままふつうにグーパーじゃけんをすることだった。うまく分かれてくれればいいが、偶然、グーカパーがひとりになる可能性だってある。ハメるつもりがないのに、末永がまたひとりになってしまったら、事態はこじれて收拾がつかなくなる。みんなは青ざめた顔のまま、じゃんけんをしようとしていた。どうか、グーとパーが均等に分かれてほしい。

こぶしを顔の横に持ってきたとき、ぼくの頭に父の姿がうかんだ。一緒にテニスクールに通っていたころ、父は試合で会心のショットを決めると、応援しているぼくたちにむかってポーズをとった。ぼくや母も、

同じポーズで父にこたえた。

「グーパー、じゃん」

かけ声にあわせて手をふりおろしたぼくはチョキをだしていた。本当はVサインのつもりだったが、この状況ではどうしたってチョキにしか見えない。ぼく以外はパーが十五人でグーが八人。末永はパーで、武藤と久保はグーをだしていた。

ぼくが顔をあげると、むかいにいた久保と目があつた。

「太二、わかったよ。おれもチョキにするわ」

久保はそう言つてグーからチョキにかえると、とがらせた口から息を吐いた。

「なあ、武藤。グーパーはもうやめよう」

久保に言われて、武藤はくちびるを隠すように口をむすび、すばやくうなずいた。そして、武藤は握っていたこぶしから人差し指と中指を伸ばすと、ぼくにむかつてその手を突きだした。

武藤からのVサインをうけて、ぼくは末永にVサインを送った。末永は自分の手のひらを見つめながらパーをチョキにかえて、輪のなかにさしだした。

「明日からのコート整備をどうするかは、放課後の練習のあとで決めよう。時間もないし、今日はチョキがブラシをかけるよ」

そう言つて、ぼくが道具小屋にはいると、何人かの足音がつづいた。ふりかえると、久保と武藤と末永のあとにも四人がついてきて、ぼくは八本あるブラシを一本ずつ手わたした。(V)

コート整備をするあいだ、誰も口をきかなかった。ぼくの横には久保がいて、ブラシとブラシが離れないように歩幅をあわせて歩いていると、きのうからのわだかまりが消えていく気がした。

となりのコートでは武藤と末永が並び、長身の二人は大腿でブラシを引いていく。コートの端までくると、内側の武藤が歩幅を狭くしてきれいな弧を描き、直線にもどれば二人ともがまた大腿になってブラシを引

いていく。きつと、ぼくたちはこれまでよりも強くなるだろう。チーム全体としても、もっともつと強くなれるはずだ。

ぼくはいつか、テニス部のみんなに、父がつくった豆腐を食べさせてやりたいとおもった。さらに、このコートで家族四人でテニスをしたいとおもい、押入れにしまつてある四本のラケットのことを考えた。ぼくはブラシを引きながら、胸のなかで父と母と姉にむかつてVサインを送った。

(佐川光晴『四本のラケット』より)

問一 傍線部A「よけいなことをしたら先輩たちに怒られるからよ」と

ありますが、先輩たちから言われていたことと考えられるものとして最も適当なものを次から選び、番号をマークしなさい。

解答番号 7

- ① 代々受け継がれた伝統的な方法は、絶対に守り抜けよ。
- ② 誰か一人を罫^わにかけるようなことはするなよ。
- ③ じゃんけんは、一発勝負だから、やり直しはなしだぞ。
- ④ コート整備を当番制にすると、チームワークが悪くなるぞ。
- ⑤ 誰かが一人でやることになったとしても、手伝ったりするなよ。

問二 傍線部B「かこつけて」のここでの意味として最も適当なものを

次から選び、番号をマークしなさい。解答番号 8

- ① 口実
- ② 証拠
- ③ 機会
- ④ 結論
- ⑤ 名目

問三 空欄(C)に入る言葉として最も適当なものを次から選び、

番号をマークしなさい。解答番号 9

- ① さらに
- ② また
- ③ たとえば
- ④ ただし
- ⑤ もちろん

問四 空欄(D)に入る一字の漢字として最も適当なものを次から

選び、番号をマークしなさい。解答番号 10

- ① 火
- ② 批
- ③ 非
- ④ 否
- ⑤ 秘

問五 傍線部E「練習にも集中できず、ぼくはどうすればいいのかを考

えながら家までの帰り道を歩いた」とありますが、今回の問題が起きてから家への帰り道を歩く「太二」の気持ちを説明したものとして、最も適当なものを次から選び、番号をマークしなさい。

解答番号 11

- ① コート整備の当番は、公平に決めることになっていたが、武藤の誘いに乗り、末永をハメたことを悔やみながらも、自らを守るために何も言えなかった自分を責めている。
 - ② みんなで考えて、末永一人にコート整備をさせたことが、先輩にばれたら大変なことになると不安になり、正しい行動がとれなかったことを反省し、今後のことを考え途方に暮れている。
 - ③ 武藤の発案で、末永一人をハメたことは反省しながらも、自分が巻き添えにならなかったことや末永が退部せず午後からの練習に参加したことに安心している。
 - ④ 末永をハメたのは、武藤の責任が大きいが、今までの末永の行動にも原因があり、自分がみんなから反発されないように行動したことはやむを得ないと考えている。
 - ⑤ 武藤の考えた行動を止める機会がなかったことや先輩や顧問に知られることが心配となったことや久保がみんなに同調したこと
- に衝撃を受け、もうどうにもならないと絶望している。

問六 傍線部F「そう答えながらも、なかなかイスを立とうとしない父」

とありますが、なぜ「父」は「なかなかイスを立とうとしな」かったのか、その理由として最も適当なものを次から選び、番号をマークしなさい。 解答番号 12

- ① いかまた家族四人でテニスをしたいという息子の希望をかなえられるという確信が持てないから。
- ② 学校で何か問題が起こったことを、勝手に頼みごとと勘違いしたことを謝る機会を待っていたから。
- ③ 学校でいじめられているわけではないと言いながら、実際はどうなのか、その真偽をはっきりさせようと思ったから。
- ④ 息子が自分自身で問題を解決しようとしていることに成長を感じ、その姿を見守ろうと判断したから。
- ⑤ 父親に心配させないようにしている息子に、さりげなく話を聞く姿勢を取ってやろうと思っただけから。

問七 次の一文が本文から抜いてあります。この一文が入る直前として

最も適当な箇所を次から選び、番号をマークしなさい。

解答番号 13

脱落文Ⅱ 誰もが、きのう末永をハメたことを後悔しているのだ。

- ① (Ⅰ) ② (Ⅱ) ③ (Ⅲ)
- ④ (Ⅳ) ⑤ (Ⅴ)

問八 傍線部G「ウラでうちあわせ可能な手口」とありますが、予測さ

れる「手口」として適切でないものを一つ選び、番号をマークしなさい。 解答番号 14

- ① もしかすると、みんなは今日も末永をハメようとしていて、自分だけがそれを知らされていないのかもしれない。

- ② もしかすると、昨日の仕返しに末永が何か仕掛けようとしているかもしれない。

- ③ もしかすると、みんなは末永ではなく、自分をハメようとしているかもしれない。

- ④ もしかすると、顧問の浅井先生に助けてもらうために、今回の出来事を全て話さなければならないかもしれない。

- ⑤ もしかすると、二、三人の仲のよい者同士で示し合わせて、たとえ負けても一人にならないように安全策を講じているかもしれない。

問九 次の会話文は、傍線部H「ぼくはブラシを引きながら、胸のなか

で父と母と姉にむかってVサインを送った」について生徒が話し合っている場面です。その内容として正しいものを一つ選び、番号をマークしなさい。 解答番号 15

- ① 生徒A 「父と母と姉にむかってVサインを送った」のは、自分の行動が誰も思いつかない案だったことを誇るためだよ。

- ② 生徒B そうじゃなくて、今回の問題でチームが一つになれるように感じた喜びを示したかったんだと思うよ。

- ③ 生徒C 喜びとともに武藤や久保が、自分の思いを曲げて、賛同してくれたことに満足したんじゃないかな。

- ④ 生徒D 私は、武藤や久保だけではなく、末永にチョコキを出させたことで家族を安心させられると考えたんだと思うわ。

- ⑤ 生徒E それもあるけれど、誰の力も借りず問題解決できたことで、キャプテンや顧問への勝利宣言をしたかったんじゃないかな。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。ただし、設問の都合上、本文の一部を改変しています。

【文章一】『徒然草』（第五十六段）

久しく隔たりて会ひたる人の、我が方^{かた}にありつること、数々^{かずかず}に残りな
長い間離れていて

く語り続けるこそあいなけれ。

興のさめることだ

* 次ざまの人は、あからさまに立ち出^いでても、今日ありつることとて、
ちよつと

息もつきあへず語り興ずるぞかし。

息つくまもなく

* よき人の物語するは、人あまたあれど、一人に向きて言ふを、おのづ
たくさん

から人も聞くにこそあれ。

他の人も

* よからぬ人は、誰^{たれ}ともなく、あまたの中にうち出でて、見ることのや

うに語りなせば、皆同じく笑ひののしる、いとらうがはし。

さわぐ

騒々しい

をかしきことを言ひてもいたく興ぜぬと、興なきことを言ひてもよく

笑ふにぞ、品のほど測られぬべき。

推測することができる

人の身ざまのよしあし、才^{ざい}ある人はその事など定め合へるに、おのが
見た目

学問

批判し合うときに

自分を

身をひきかけて言ひ出でたる、いとわびし。

引き合いに出して

(注) ○ 次ざまの人：教養や品位の劣っている人。

○ よき人：身分が高く、教養があつて、上品な人。

○ よからぬ人：身分が低く、教養がなく、下品な人。

【文章二】『徒然草』（第七十段）

さしたることなくて人のがり行くは、よからぬことなり。用ありて行
これという用事も

もとへ

きたりとも、そのこと果てなば、とく帰るべし。久しくゐたる、いと
早く

むつかし。

わずらわしい

人と向かひたれば、詞^{ことば}多く、身もくたびれ、心も閑かならず。よろづ
万事

のこと障^{さは}りて時を移す、互ひのため益なし。いとほしげに言はむもわろ
過すのは

いやいやながら

よくない

し。心づきなきことあらむ折は、なかなかその由^{よし}をも言ひてむ。同じ心
気のりがしないことが

かえつて

理由 言つてしまおう

に向かはまほしく思はむ人の、つれづれにて、「今しげし。今日は、心
することがなくて

もうしばらく

閑かに」など言はむは、この限りにはあらざるべし。阮籍^{A げんせき}が青き眼^{まどこ}、誰

もあるべきことなり。

ありそうなこと

そのこととなきに、人の来たりて、のどかに物語して帰りぬる、いと
これという用事も無いのに

よし。また文も、^B「久しく聞こえさせねば」などばかり言ひおこせたる、
手紙

いとうれし。

(注) ○ 同じ心に向かはまほしく思はむ人：お互いによく気心が合つて、対
座したいと思うような人。

【文章三】前の二つの文章を読んで、先生と生徒が話し合ったもの。

先生…『徒然草』を書いたのは、鎌倉時代から室町時代にかけての知識人、（C）だね。この二つの文章で彼はどのようなことを言っているのか考えてみましょう。

【文章二】では会話におけるマナーを言っています。会話でのよくない例をいくつか紹介しています。

生徒A…久しぶりに会った人が、自分のことばかりを話し続ける、これは不愉快です。

生徒B…その通りです。こちらでも話したいことがあるのに話をさせてもらえないのはほんと不愉快。

生徒C…こんな人もいますよ。ちょっと外出した折に見聞きしたことを最新情報だと言わんばかりに、息もつかずに面白がって話す人。

生徒D…今でもいるよね、そういう人。「ねえ聞いて聞いて」って感じで得意げに話す人。さらに今はちょっとしたことで大げさにSNSに書いたり、根拠のないことを拡散させたりする人もいるので注意が必要だね。フェイクニュースには注意しなきゃ。

先生…ちょっと話がそれてきたので、『徒然草』に戻して発言を続けてください。

生徒E…こういう人もいて書いてますよ。大勢の人を前にして話すとき、誰か一人に向かって話して他の人は無視。たとえ頭のいい人だとしても感じ悪いわ。

生徒A…出しゃばりの人も困ったものです。大勢の人の前にしゃしゃり出て、見てもいないのにまるで自分が見てきたことのようにつくろって話す人。それを聞く人も笑って大騒ぎ。

生徒B…そうですね。会話の様子から、その人たちの品性がわかりますよね。

生徒C…人の容姿とか学問について批評し合うとき、自分を引き合いに

出している人がいます。それもいやな感じですね。

先生…はい、会話のマナーについて発言してもらいました。現在の私たちにも通じることがいくつかありますね。

【文章二】では訪問のマナーについて書いてあります。

生徒D…大した用もないのに人を訪ねるのはやめてほしい。

生徒E…そうそう。用事があったて来たとしても、用件がすんだらすぐに帰ってほしいわ。長居は迷惑。絶対にダメ。

先生…どうして長居はだめだと筆者は言ってますか。

生徒A…話が続いているとつい言葉数が多くなって長くなってしまいます。体も心もなんだか疲れてしまって、お互いのためによくないかもしれません。

生徒B…だからといって、露骨にいやな顔をするのもよくありません。

生徒C…でもね、本当に気分が乗らないときは、都合が悪いことを素直に言ったほうがかえっていいかもしれません。

生徒D…長居も許される場合もありますよ。暇なときに、気の合う人と時間を気にせず落ち着いて話をするのはいいことだと思います。

生徒E…なるほど。

先生…そうですね。会話でも訪問でもマナーが大切ですね。共通するのは（D）

問一 【文章一】にも【文章二】にも「物語」の語が出てきます。ここ

ではどういう意味ですか。最も適当なものを次から選び、番号を
マークしなさい。解答番号 **16**

- ① 和歌を作って詠むこと
- ② 一人が大勢に向かって話すこと
- ③ 討論をすること
- ④ 世間話をする事
- ⑤ 『源氏物語』などの物語を朗読すること

問二 【文章二】の傍線部A「阮籍」は三世紀の中国の人で、自分の気

に入った人が来ると青い眼をして迎えたといわれる人です。逆に気
に入らない人が来たときには違う眼の色で迎えたと言われます。こ
こから出た言葉で、人を冷たく扱うことを何と言いますか。最も適
当なものを次から選び、番号をマークしなさい。解答番号 **17**

- ① 緑眼視
- ② 白眼視
- ③ 赤眼視
- ④ 黄眼視
- ⑤ 黒眼視

問三 【文章二】の傍線部B「『久しく聞こえさせねば』などばかり言ひ

おこせたる」では「文（手紙）」のマナーについて言っています。
その内容として最も適当なものを次から選び、番号をマークしな
さい。解答番号 **18**

- ① 「長らくご無沙汰しております」などと簡潔に近況だけを記
したものを。
- ② 「長らくあなたのことを聞いていません」などと返事だけを催
促してくるもの。
- ③ 「長らくのご無沙汰です」から始まり、同じ内容だけが繰り返
し書いてあるもの。
- ④ 「久しぶりですね」から始まり、自分の都合だけが書いてある
もの。
- ⑤ 「久しぶりに会いたいです」とだけ書いて、それとなく訪問す
ることを示すもの。

問四 【文章三】の空欄（C）には『徒然草』の作者が入ります。

最も適当なものを次から選び、番号をマークしなさい。

解答番号 **19**

- ① 大伴家持
- ② 天智天皇
- ③ 井原西鶴
- ④ 兼好法師
- ⑤ 紀貫之

問五 【文章三】の空欄（D）にあてはまる言葉として、最も適当

なものを次から選び、番号をマークしなさい。解答番号 **20**

① 教養が低いと、人への気遣い、思いやりが欠けてしまうよう
です。だからまずは教養を身につけましょう。

② 身分や教養のある人は、人への思いやりが自然にできていま
す。教養とマナーを身につけたいものです。

③ 時と場合により、周りの状況に合わせて振る舞うことは大切で
すが、まずは積極性です。

④ 人への思いやりが大切。身分や教養があっても、人を気遣うこ
とができなければいけません。

⑤ 会話も訪問も出しゃばりはいけません。昔はとにかく人に合
わせることが求められていたんですよ。

問六 【文章三】で、【文章一】や【文章二】を誤って解釈している生徒

がいます。それは誰ですか。最も適当なものを次から選び、番号を
マークしなさい。解答番号 **21**

- ① 生徒A
- ② 生徒B
- ③ 生徒C
- ④ 生徒D
- ⑤ 生徒E

四 次の各問いに答えなさい。

問一 傍線部の漢字と同じ漢字を含むものを、次からそれぞれ選び、番号をマークしなさい。

1 作品の収集と展覧会のカイサイ。

解答番号 22

① 眠気をモヨオす。

② ワザいをもたらす。

③ 波がクダける。

④ 罪のサバきを受ける。

⑤ 食卓をイロドる。

2 期待と不安のコウサクした感情。

解答番号 23

① サクジツの失敗を反省する。

② サクイ的に文章を改変する。

③ 冒頭の一文をサクジョする。

④ 事典のサクインを活用する。

⑤ 試行サクゴを経て成功する。

3 獲得した財産のタカに応じる。

解答番号 24

① ゴウカな食事を満喫した。

② 筋肉に少しつつフカをかける。

③ カモクな人が珍しく発言した。

④ カモツを載せて走行する。

⑤ カブンな賛辞に恐縮する。

問二 「いたたまれない」の意味を次から選び、番号をマークしなさい。

解答番号 25

① もういい加減にしてほしい。

② 何も言うことがない。

③ くやしくてたまらない。

④ その場にじっとしていられない。

⑤ 怒りをこらえきれない。

問三 「暗中模索」と意味の近いものを次から選び、番号をマークしなさい。 解答番号 26

① 半信半疑

② 疑心暗鬼

③ 五里霧中

④ 四面楚歌

⑤ 優柔不断

